

## 松林寺谷のずんべらぼう (末・青野)

時は戦国、織田信長が天下取りを進めていたころ、丹波の国の武将である波多野秀治は、難攻不落と言われた八上城の城主だった。

信長の家臣の明智光秀が、大軍を率いて、この城に攻めてきた。ところが、さすが八上城、びくともしない。半年経つても、攻め落とせないことに腹を立てた信長は、光秀を呼び出してしかりとばした。

「こりや、光秀！ 何をぐずぐずしておる。城は天然の要害じゃ。戦法を考えろつ。あと半年以内に絶対に攻め落としてしまえ！」

光秀はふるえあがった。

「何が何でも落として見せまする。」

八上城にとつてかえした光秀は、さつそく城のまわりに堀を作つて柵を立て、城への出入りができないようにした。城の中の食料が無くなるのを待つという作戦を立てた。いわゆる兵糧攻めである。

さらに、松林寺や遠くの虚空蔵寺からも八上城へ食料が

運ばれていたことを知ると、腹を立てた光秀は兵を寺に向かわせた。お坊さんを一人残らずとらえて、寺もろとも焼き殺してしまった。

それからだいぶん経つてから、播磨宍粟の木こり数人が松林寺山で仕事をしていた。

切り倒した木材を馬に引かせて運び出そうとした時、松林寺谷の奥からかわいい娘があらわれた。今まで見たこともない、玉虫のように七色に変わる着物を着ている。

「こんなところに娘が……。この奥に家なんか一軒もないはず。ふしぎよのう。」

「ほんとにのう。じゃが、この世のものとも思われんきれいなべべ（着物）じゃのう。」

と見とれていた。

娘はこちらに向かつて歩いてくる。しかし、どうも歩き方がおかしい。近づいてくるにつれて

ザーザーザー ザーザーザー

と、妙な音も聞こえる。また、何とも言えない生臭いにおいが鼻をつく。そのにおいは強烈で、気が遠くなりそうなほどだった。

つないでいる馬が急にガタガタッ、ガタガタッと足を鳴らしたかと思うと、「ヒヒーン」といななき、前足をあげて立ち上がり、暴れ出した。

木こりたちはただならぬものを感じ、あわてて馬の手綱たづなを引き、その場から逃げるように急いで歩き出した。

娘は木こりたちの後を追いはじめた。やがて、追い越した先の大きな岩の上に立つと、こちらを向いた。

なんと、あのかわいい娘の顔はどこへやら。目もなく、鼻もなく、口もない。化け蛇へびのずんべらぼうだった。あごの先から平たく長い舌したをべロべロと出した。

木こりたちの驚きようはと言うと、運んでいた木をその場に放り出し、馬に飛び乗るや馬にしがみついて一目散いちもくさんに逃げ出すは、大声でなにやら叫びながら転がるように山をかけ下りるは、みな大あわてだった。

村に帰っても、あまりの恐ろしさにふるえが止まらない。ぶるぶる、ぶるぶる、ふるえながら、

「松林寺山にずんべらぼうが出たぞー。」  
と村中に知らせて回った。

「ずんべらぼうが出たぞー、ぶるぶる。」  
「ずんべらぼうが出たぞー、ぶるぶる。」

村人から村人へとその恐ろしさが伝わっていった。松林寺山では、殺されたお坊さんたちの恨うらみみが重なり合あい、それが化け蛇となって人々を怖こわがらせるようになっていったというこつちや。

